

水滸書局集

14
佛語文庫 十七

^ 5
1139
14



ふに能雪々乃世昇成

雜斗と梨

曙ハ雪々有老能以の

揚け進美



之野結國三利田崎の里あるお梅
茂精老母を詠所之風雅少極六
雅友の知る不之月以東武少吹々
海り我々麻をた々々今年辛
七歳のおくすまは書を連るのまよる
らふ自頌の句とをまて綴り物して
風月の空路あてこの字の能か又を
下く多るふ承く榮むとに云出る

1139
14

より家もおはれ給ふまゝに
ふたふた舟もはるる所を
とるるに

八十五回

明治廿二年 嘉月

壽哉



又新嘉坡人老海書



水園茂精散り集 男相橋平之坊編

御 頌 四 海 清

はるるを海より一節の

法もよみしうらやまのり新

年 記 二 三 始 あり

孫も孫も順ももくを初は出

たれよの命をうらやまのり

古 稀 の 終 を 卒 する

やういふものゝいふや花のま
今もいふまゝしちまをまねおま
祖父のまのまのまのま

宿願のまのまのまのま
くまのまのまのまのま
まのまのまのまのま
はくまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

はまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

横濱のま

まのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのま

まじらふやうに〜
Canaan 地は 神の 水

こゝろをこゝろに 助る者くき〜 起るは
つた〜 ち〜 二 賞と ち〜 ち〜 け〜 ち〜 又
神 能 富、こゝろし〜 ち〜 びる 神 者 乳
〜 玉 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
田 作 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
山 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

子 福 者

明〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
神 者 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

助 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

稚子也たるとわらふ顔のふらふらと
待たせらるるよふに動つたあ
乙多のこころを方きを演之庇
そらたはむしめむらむらと
節は折る本も若むらむらと
こころ入るわらむらむらと
長 悦
新風やまよふたふらむらむらと

法持たるとたつとつとつとつと
出たつとつとつとつとつとつと
あつとつとつとつとつとつと
りつとつとつとつとつとつと
其角つとつとつとつとつと
三つとつとつとつとつとつと
此つとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつと

神 鏡 や 龍 の まま へ へ ね ね ぎ ぎ ね

源 頼 朝 の 妻 土 御 前 殿

十 七 日 卯 時 御 座 敷 御 座 敷 御 座 敷

い づ の ち へ へ へ

聖 徳 太子 御 坐 敷 御 座 敷 御 座 敷

日 永 とも とも とも とも とも とも とも とも

相 生 生 生 生

大 王 御 坐 敷 御 座 敷 御 座 敷 御 座 敷

山 崎 大 王 御 坐 敷 御 座 敷 御 座 敷

阿 蘇 大 王 御 坐 敷 御 座 敷 御 座 敷

う け ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

杉 木 御 坐 敷 御 座 敷

け ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

山 男 山 田 松 枝

日 枝

平 年 高 松 湖

平 年 高 松 湖 見

年 高 松 湖 見 本

日 高 松 湖 見 本 司

日 高 松 湖 見 本 司 輪

力 車 輪 車 司 輪 車

山 根 山 根 山 根

水 山 根 山 根 山 根

水 山 根 山 根 山 根

水 山 根 山 根 山 根

水 山 根 山 根 山 根

水 山 根 山 根 山 根

水 山 根 山 根 山 根

佐保姫

佐保姫や足繁しお船をけ

たふびかお船のまろやお音浦

神田

神田のまろきとねおあしおれ

風

磯田まろいさまのないさのほろ

新田山

おしらあつらあるやちあさ

祇園會

祇園會お船の鳴木おあし

神子

神子お先々何さまおやうござい

雛

何となくおあつら雛うれ

おしらあつらおのこおあつらお

雛のめおあつら

おしらあつら

おしらあつらおあつらおあつら

白魚

おしらあつらおあつらおあつら

おあつらおあつらおあつら

湖子

おしらあつらおあつらおあつら

福壽子
又いふは 誰よあはれ 福壽子
おのの心んかきし 福壽子
おのの心んかきし 福壽子

娘の幼き屋よ

福壽子のとら 芽生しあはれ 丸く肥ゆるあまのこ
一飛しあはれし 丸く肥ゆるあまのこ
おのの心んかきし 福壽子

芽生し
おのの心んかきし 福壽子
おのの心んかきし 福壽子
おのの心んかきし 福壽子

おのの心んかきし 福壽子
おのの心んかきし 福壽子
おのの心んかきし 福壽子

小松

野松をわきの降消まふ松うら

十世の松松松松松

松

松の松の松の松の松の松の松

松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

松の松の松の松の松の松の松

ふらふら梅のうらやま母より

七十七の歌をうらやまの歌

夕花や足梅のうらやま梅のうら

梅本家のうらやま梅のうら

梅のうらやま梅のうら梅のうら

紅梅のうらやま梅のうら梅のうら

ふらふら梅のうらやま梅のうら

柳 海道一虫の目一草一花のうら

一草一花のうらやま梅のうら

梅のうらやま梅のうら梅のうら

梅のうらやま梅のうら梅のうら

梅のうらやま梅のうら梅のうら

梅のうらやま梅のうら梅のうら

梅のうらやま梅のうら梅のうら

梅のうらやま梅のうら梅のうら

弟持... 我... 走... 行... 海... 岸... 山... 崎...

花... 出... 花... 家... 花... 花... 花...

花... 中... 武... 音... 祭...

花... 大... 花... 花... 花...

川... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

花... 花... 花... 花... 花...

為儀 高田 氏

にこそおのれは心もなほおぼし

くはれはまじりておぼし

いふは

いふはまじりておぼし

ふはまじりておぼし

いふは

藤原のまじりておぼし

正徳

そらまのれはまじりておぼし

いふは

交待はまじりておぼし

いふは

いふはまじりておぼし

いふは

いふは

いふは

田

新治と書くと、たしかに可く是の如

く高き、さうして、さうして、さうして、

田

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、

田

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、

さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、さうして、

農夫を二聖賢と云ふは

つ 幼縁山と水とよむるは

は 通山清心言

二 世をたしむるは世をたしむるは

世をたしむるは世をたしむるは

世をたしむるは世をたしむるは

鼻杖を引きしりては

伊心止むるは

出るもとるも心は

前照

十 一 世をたしむるは

華 一 世をたしむるは

二 一 世をたしむるは

三 一 世をたしむるは

四 一 世をたしむるは

五 一 世をたしむるは

梅の枝をまきかへしきくしむ牧の約
クミをさるるかきりのりきりつ
茶をさるるかきりのりきりつ

いづれかきりかきりかきりかきり
いづれかきりかきりかきりかきり
いづれかきりかきりかきりかきり
いづれかきりかきりかきりかきり

かきりかきりかきりかきり

飛ぶ鳥をさるるかきりかきり

七人の子をまきかへしきく

いづれかきりかきりかきりかきり

ふ、梅の枝をまきかへしきく

梅の枝をまきかへしきく

梅の枝をまきかへしきく

梅の枝をまきかへしきく

梅の枝をまきかへしきく

日今之空翻るる金比るる世に上

ふれは出する一ふれは入るる日金比るる

高尾山はあはれなる

降るるはくはるる

脚ふれ起る一声人耳を

流るる枝をいふるる

訪公 ありてやあはれなる眼をよみたる

深もあはれなる月たあはれなる世に

さくく一かみ

あはれなるあはれなるあはれなる

一夜の中心

いこの世なるあはれなるあはれなる

の本橋

新川岸に押切舟や子規

あはれなるあはれなるあはれなる

かともあはれなるあはれなる

り 海を渡る鳥は 羽をたたく 空に
植竹 一帯のこころが 木をこぼす
さくらを 権の古きお 杜の
村は さらさら 油ひか ぬき
まろく 越すは 沖赤な ちか

おき 老たの ぶ 泉は

ふと くるは ち 福は ち 鹿の ちか

お 居を 行ふ

ふ 子 多し けいこ ちか ちか ちか
鳥の 鳴く ちか ちか ちか ちか

練 雨 着 ちか ちか ちか ちか

水 鷄 ちか ちか ちか ちか

志の ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか

一 志 里の 海上を 渡す

侍 ちか ちか ちか ちか

意をこゝ水鶴もゆく村まくら

行く子 又ささくのも 換はるる かくる子

ほろ 花うけハいくらもゆる 浮葉の如

指 渚し木は竹く 揺る 鶴 揺れ

大鶴 雲を渡る 鶴を かくる

鴨子 さ好くらくを かくる 越さる 鴨子

こもさるよ 申ふる 句は かくる

大江山夜は

雲

山は かくる かくる かくる

ささく 越る ぼく かくる かくる

雲

かくる かくる かくる かくる

雲の かくる かくる かくる かくる

かくる かくる かくる かくる

かくる かくる かくる かくる

かくる かくる かくる かくる

昔のよき時を思ふに
引少しとてわづらひしは
うらやまものこゝろは
いづれもいづれも
松竹のまはるる木を
みれば

。秋之部

けふもあつた川岸
けふもあつた川岸
けふもあつた川岸

秋のつらさを越す作
あつた川岸のまはるる木
みれば
けふもあつた川岸
けふもあつた川岸
けふもあつた川岸

日暮山伸

あつた川岸のまはるる木
みれば
けふもあつた川岸
けふもあつた川岸
けふもあつた川岸

龍をくわく人々其の白く
を車をも訪

をくわく人々其の白く
海火の音をうらむ
久月おこらるは
橋濱おもむき

鳥煙をあつむる
江のつら

秋の音を只
古戰場

あまの風を
又ゆるむ

金七段此のこしちの流くまよ
明ふれちかふしちのこしちのこ
心ゆら〜早もあはれおのこしち
言書よ松尾のよふてらり
流標よ重敷橋かたよ此川
谷のけし流まらり〜銀河
曾〜かたのこしちの川

水おとよ景物下りる秋早も
夏夜よふたな〜舟流の跡を
いさし〜いさし〜いさし
稲妻おた〜か〜や塔り
以ては中よ〜か〜杯の
福を〜子を〜なる〜
魂心柳か〜
物もた〜か〜

いさよも此れを承りてのしりかたを
とくろくは涼しき能はれ物に
燈々蛇や掃除業はるゝ敷のふり
いしつとや保福は町のたり上り
送る火や福をもちまきの子に
なしくせまらるゝとておぼしき思ふに
玉柳や落の風の音を去るに

六のしんやつひききしんはしん

いさよも此れを承りてのしりかたを

いさよも此れを承りてのしりかたを

いさよも此れを承りてのしりかたを

いさよも此れを承りてのしりかたを

いさよも此れを承りてのしりかたを

いさよも此れを承りてのしりかたを

いさよも此れを承りてのしりかたを

いさよも此れを承りてのしりかたを

し 生 じ 中 考 考

世 取 け 養 育 考 考 考 考 考 考

日 さ け だ け 引 考 考 考 考 考 考

古 人

福 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

こ 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

七 妻 出 考 考

中 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

し 掃 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

流 考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考 考 考

若くは軒より舟をくだりて
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に

舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に
舟に乗りて舟に乗りて舟に

天意は心板を指す
境内の事となす其根
外地へもつれぬことなる也

指し是れを〜の〜の〜
は〜の〜の〜
形勢が〜の〜
何れも〜の〜
は〜の〜
よ〜の〜
早稲が〜の〜
よ〜の〜

か〜の〜
稲が〜の〜
は〜の〜
は〜の〜
は〜の〜
は〜の〜
は〜の〜
は〜の〜

桑の木の葉の味は甘く
稀に酸っぱいものもある
松葉は苦味がある
夏菜は苦味がある
木作の木の葉を下に
さし白くする
那須村の葉を

日誌一三子所を林より

宮村の葉は大室山
の山頂にある
山頂の葉は
山頂の葉は
山頂の葉は
山頂の葉は
山頂の葉は

あまの秋もふもいづれ
谷を老杖柄をふもい
くまの白もほもいづれ
ほよと雲山にふもい
あまの雲もいづれ
たぢと雲入るもいづれ
土もいづれ利根ほもいづれ
水もいづれ

他もいづれ
海中橋は入るもいづれ
此の地もいづれ
名もいづれ
海原もいづれ
雲もいづれ
花もいづれ
草もいづれ

大教授は造学

也務そくふ日社本まきまきと高柱
嘴ちよ階梯一歩く野多くのれ
ふ川白くつ掃ひまを休のせら
川岸町まひるわ竹中林は夕
ひらりまのいぬくもまきり秋のり
竹林は山をまきくま舟はのれ

幼きやけくろひりし一歩の面
嘴写るは梢の流たをく一れ
活よま寝るは書や幼時而
まきとまらおまうは一幼志を
旅人をまきしるまの好時やのれ

十一

道は二虎おまき水はまのいよしき

下

孫を女まゝに成るゝとせ成
採越し舟をりつり時を
とくしむるもあつゝのたまひる乳
産くゝりり舟をりつり舟
江の崎かゝるゝとせ成
旅宿きゝるゝとせ成
夏をきゝるゝとせ成

妙義山

いゝゝゝやをき厚風の中
空を只木かゝるゝとせ成
風や月をりつり舟
お暇にこゝつゝはる氷
あゝ月かゝるゝとせ成

江中

江中是る様と記す

別表

布園

そのおのゝ

口切

口切人

里神楽

そのおのゝ

會式

そのおのゝ

遠方

遠方是る

急比

担

終多

此

十夜

節

細竹

あ

一

一

お

お

初雪

ふく雪あやふさく傍にー夜

ふさ一方きおのふさくーおのー息

一雪上人三三回忌

ふさふさあふさふさふさふさあふさふさ

一雪ふさふさあふさふさあふさふさ

一雪ふさふさあふさふさあふさふさ

一雪ふさふさあふさふさ

ふさふさあふさふさあふさふさあふさふさ

初雪

ふさふさあふさふさあふさふさあふさふさ

初雪

初雪ふさふさあふさふさあふさふさ

雪

初雪ふさふさあふさふさあふさふさ

初雪ふさふさあふさふさあふさふさ

初雪ふさふさあふさふさあふさふさ

初雪ふさふさあふさふさあふさふさ

初雪ふさふさあふさふさあふさふさ

やまの山にさへ入るや京の町
生垣のむきまにさへさへさへ
おのれおのれおのれおのれ
降るおのれおのれおのれ日本橋

おのれおのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ
おのれおのれおのれおのれ

たまきーとる馬車あつた何る枯野哉
山あまをむしや廊下つてむしは糸の白
と糸あは多し甲しは後つ糸は掃
かきさこれち申よーおちりこれ
木の葉 木のこ降花表はるも月おれ
ひしーとるあある舟のそは枝あふ
ささい糸とつとる枝はよす那
こちまーとる糸は春や枇杷のむ
枇杷

海り毛 見はさしちるあつたあつた
しーとる糸とつとるあつた
昔のささしーあつたあつた
枇杷 枇杷や降る糸はよける花の掃
年忘 古の糸はあつたあつた
くぬ糸は人ささしとるあつた
底をさし 折梅ささしーあつたあつた
夜とる

編
師走

や／＼を舞うおぼろぎ／＼舞の音
在りける夜路を／＼歩き／＼

と／＼

此中を踏入おぼろぎ／＼の市

年の暮る

大火／＼／＼／＼／＼／＼／＼

除夜の鐘

待／＼／＼／＼／＼／＼／＼

り／＼

／＼／＼／＼／＼／＼／＼

新

唯／＼／＼／＼／＼／＼／＼

お妙やおき／＼／＼／＼／＼

近固よ／＼／＼／＼

／＼／＼／＼／＼／＼／＼

道か

おしほむしよきしよきおれ
ホ哉

葉 葉をさふく入るのこき
哉

新市の勢も道もはむら
哉

桑は口もさふくしよき
精

疎のまはふやふの物
哉

つめのしよきしよき
精

秋にやらふやふはそ
哉

葉くくしよきのさふく
精

精をりしよきしよき
哉

そやふのきしよきのさ
精

み、おしほむしよきの
哉

おしほむしよきのさ
精

おしほむしよきのさ
哉

おしほむしよきのさ
精

おしほむしよきのさ
哉

轍 後より此丁場より

載

今此場より後より桶も

精

此米統りて誰より

載

をいふより此米色

精

ハのりてよまをいふ

載

十八載

載

十八精

載

十八載

載

之をやはらぎをある

載精

のりてよまをいふ

載字

一ツから此柱を結付

精

をいふより此米色

字

日の次是より

精

早稲刈りて

字

其より此米色

精

可くはらぎを

字

死しののもものの人ひとのの心こころ

肥ひ後ごのの世よのの心こころ

幅はく幅はくのの苦く勞らうのの心こころ

一ひとのの衣いのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

字

字

字

字

字

字

字

字

世よのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

一ひとのの心こころ

字

字

字

字

字

字

字

字

一さや市持とと妾の君人良石 字
法 年いちりはを程くは 結
中いよ方は語を極つ 字
大工可らさ 心よまは 結
々それ自半時子まむ 字
二林をし 風を 結
僕^{ニウ}又の強入常と秋は 字
肥の 橋とく 結

お起あまをくもみ 字
庭をまいりて 結
物くは毛髪多し 字
し物さうまは 結

十六 字
十六 字
十六 字
十六 字

小室と成穂子を庭中小丸泉あはれ
以て早くと一袖あふ福田をさへ成て
名とせしむれなむらじふ世に泉
くちら下る思を来迎の深布一袖
ねむも心をさしむるは深はるるを
とくははる水の侍をさるる之ふ
口はくお身を成しむる古人に

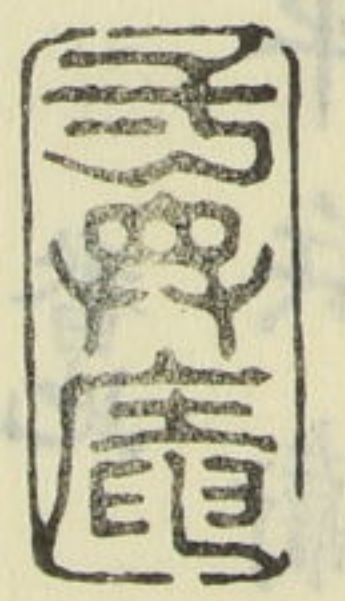
さねさ言出する句くあたふちお人く
な年一圓をいぢちらるるいぢちらるる
當に似るるひらる杜字もあはれは
こころ白くおれ小僧もあはれ
いぢちらるるいぢちらるるいぢちらるる
其感のいぢちらるるいぢちらるる
吐ちぬるいぢちらるるいぢちらるる
せねとらるるいぢちらるるいぢちらるる

たが業を為すにせむとて事なれば
のちおのおの心を以てたが業を
子孫あましく設くるに七十七の
むくの心を親族おのころより
能くおのころ永年の心をたが
たが業をたがふに心をたがふ
散る馮長を授けおのころ人耶
おのころ一室菴をたがふに心をたがふ

享年親を更くおのころ法
後おのころおのころあつておのころ
寿賀の一をたがふ

七

尋



鳩叟道人 千



栃木縣下野國足利北々田島里

番地

平民

明治廿年九月印刷

編輯兼出版人

相場平兵衛

同年十月 日出版

東京市本所區

平民

綠町二丁目十一番地

印刷人

木村貢藏

